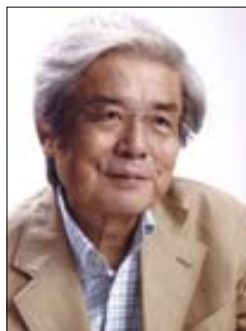


こころ



養老孟司

TAKESHI YORO

心という言葉、私は好んで使うことはない。一般によく使われるから、仕方なしに使う。

1つには、意味が多義的なのである。言葉はたいていそうだが、それにしても心という言葉は意味が広すぎるような気がする。「どこにでもいるということは、どこにもいないということだ」。これはセネカの言葉だという。神は遍在する。そういう思想に反論したのかもしれない。

西行の『山家集』のなかにある、「心」を含んだ歌を拾ったことがある。たくさんあったが、見ているうちに、西行が心をいかに強く実在と見ているか、その感覚が伝わってくるような気がした。もはや私は、西行の言葉の世界には住んでいない。

心という代わりに、私は意識と表現する。意識はおそらく仏教由来で、その意味では昔から外来語的な抽象性を持っていたのであろう。般若心経には、無意識界という言葉があったはずである。

もちろんこれは1つの単語ではないかもしれない。でも意と識をつないで使うのは、たいへんもつともなことなのだと思う。コンピュータ的になら、入出力のことだからである。

いまでは昆虫も寝ることがわかってきた。ということは昆虫にも寝ている時間と起きている時間があるということで、起きている間はいわば「意識」があるということになる。それを虫の心といってもいい。虫採りをしていると、たしかに心があるなあと、なんとなく思う。珍しい虫を見つけたら、目を合わせてはいけない。虫屋はそんなことをいう。目が合うと、逃げてしまうのである。よそを見ているフリをして、サッと捕まえる。

心でも意識でも、どちらでもいいか。まあ一般向けに表現するなら心で、専門的な意識かなあ。そんなところで適当にごまかしておくか。歳をとると、万事にそういう解決が多くなるのである。